

セイリョウライン SDGs実践

### エコキャップ運動など掲げる

SDGsにおける実践可能な目標に取り組みセイリョウライン(幣旗農行社長、愛知県大府市)では、年間の無事故日数に応じた寄付を行うことで全従業員の参画意識を高めている。

2020年12月にSDGs宣言をした同社は、持続可能な地域社会の実現を目標として、

システムのさらなる運用で社内品質を高めるとともに、それらを通じたスタッフらの意識向上にも期待を寄せている。

(朝妻聖一)

が特徴だ。初回となる2021年は、二十数万円を寄付。各団体から感謝状が送られてきた。こうして形となって表れることで、幣旗社長は「SDGsへの貢献意識が芽生え、自分たちが仕事をしっかり全うできたことに対し、周りの人へ感謝する気持ちも育まれる」と効果に言及。

SDGs推進に携わる同社経理課の杉山愛菜さんは「社会に言葉は浸透していても詳しく話せる人が少ない中で、私たちは関係先に聞かれた時に胸を張って答えられる」と、実態の伴う活動の意義にふれた。

(富田 香)

指す取り組みとして、エコキャップ運動や寄付活動などを掲げている。寄付は1月から12月までの年間稼働日における無事故日数×1000円を各方面の支援団体へ送金するもので、「野球選手やサッカー選手の社会貢献活動をヒントに、物流のプロとしてできることを考えた」と幣旗社長。寄付先は交通遺児育英会・UNHCR・ユニセフ・フローレンス・日本財団の5団体で、アンケートの票数によりそれぞれの寄付額を案分。全員の気持ちを反映している点



杉山さん(左)と幣旗社長